

## 『荒れ野の40年』から考える新しいコミュニティ形成の課題

Issues in the Formation of “New” Communities: Examining the Book of Exodus’ “Forty Years in the Wilderness”

空閑 厚樹

KUGA Atsuki

### Abstract

This essay discusses challenges in the formation of a new community using the Old Testament’s Book of Exodus as a guide. We also discuss the contemporary significance of referring to the Old Testament as a historical record rather than a religious book. The Old Testament describes the history of the ancient Israelites who left Egypt and wandered in the wilderness for forty years before forming a new community of their own. Not only was Egypt was a dynasty based on the existence of slaves, it also was an empire that was ruled by a powerful pharaoh. However, Israel, at the time, was a distinct community consisting of tribes of self-employed farmers who rejected kingship and slavery. Although life in Egypt was not lacking in material resources [the pots of meat in Egypt (Ex. 16: 3)], there was no freedom. The difficulties of forming a community that rejects kingship and slavery, maintaining internal order among its members, and changing the people’s conventional way of life were recorded as the “forty years of wandering.” In examining the contemporary significance of this Biblical story, we will focus on sustainability as a key concept that characterizes the challenges of modern society, reveals the failures of our current conventional, dominant way of life, and suggests that humanity needs to change its ways of living. This essay discusses lessons from the forty years of roaming in the wilderness and their contribution to current debates and practices on sustainability.

**Key words:** Exodus, “Forty Years in the Wilderness”, Sustainability, Internal order, SDGs

## 要旨

本論は、旧約聖書「出エジプト」および、そこに書かれた「荒れ野」や「40年間の放浪」の物語を手掛かりとして、新しい共同体形成における課題を提示する。併せて、宗教書ではなく歴史資料として旧約聖書を参照することの現代的意義を論ずる。古代イスラエルの民がエジプトを出て、「荒れ野」を40年間彷徨った後、自分たちの新しい共同体を形成する歴史が旧約聖書に書かれている。エジプトは、奴隷の存在を前提とし、強大な王権を持つファラオの治める帝国に代表される共同体であり、イスラエルは自営農民の部族からなる、王と奴隷の存在を否定した共同体であり、古代世界では特異な存在だった。エジプトでの生活は物質的には恵まれていたものの（「エジプトの肉鍋」出エジ16:3）、自由はなかった。王と奴隷を否定した共同体を形成し、内的秩序を保ち、従来の生き方を変えることの困難が「40年間の放浪」として記録されている。この聖書の物語の現代的意義を検討するにあたり、現代社会の課題を特徴づける概念として持続可能性を取り上げる。これは、現行の一般的な生き方を続けることは持続可能ではないこと、そしてそのような生き方を変える必要があることを意味している。本論は「荒れ野の40年」が、持続可能性をめぐる議論および実践に提示しうる視点を検討する。

キーワード：出エジプト記、「荒野の40年」、持続可能性、内的秩序、SDGs

## はじめに

1985年8月5日、西ドイツの大統領ヴァイツゼッカーは40年前ドイツが無条件降伏した日を記念して連邦議会で演説した。敗戦後25周年や30周年といった切りの良い数（ラウンドナンバー）ではなく、40周年を記念することがなぜ重要なのか。ヴァイツゼッカーは演説の中で次のように語る。

人間の一生、民族の運命にあって、四十年の歳月は大きな役割を果たしております。ここで改めて旧約聖書を開くことをお許し願いたい。信仰の如何にかかわりなく、あらゆる人間に深い洞察を与えてくれるのが旧約聖書であり、ここでは「四十年」が繰り返し本質的な役割を演じております。イスラエルの民は、約束の地に入って新しい歴史の段階を迎えるまでの四十年間、荒れ野に留まっていなくてはなりませんでした。

当時責任ある立場にいた父たちの世代が完全に交替するまでに四十年が必要だったのです。……「四十年」というのは常に大きな転機を意味しております。暗い時代が終わり、新しく明るい未来への見通しが開かれるのか、あるいは忘れることの危険、その結果に対する警告であるのかは別として、四十年の歳月は人間の意識に重大な影響を及ぼしております。

（ヴァイツゼッカー2009）

ここでいう「四十年」は、敗戦後40年ということで物理的時間を意味すると同時に、旧約聖書を参照していることから象徴的な意味をも有する。ここで言及されているのは「出エジプト」である。そこでは「奴隷」として苦役に服する状態にあったエジプトからイスラエル民族の祖先となる人々が脱し、「約束の地」に至るまで40年という時間を要したと書かれている。「四十年」とは世代が交代するのに要する時間、すなわち社会や共同体の支配的価値観が入れ替わるのに要する時間でもある。そして、その舞台は「荒れ野」だった。そこは、食べ物、飲み物の調達が容易ではなく、野獣や盗賊に襲われる危険があり、気候条件は厳しい。意識的に生きていかなくは生存が脅かされる状況である。ヴァイツゼッカーは、そのような「荒れ野での「処罰と恵み」の四十年、それと大戦後のドイツの苦節の四十年とを重ね合わせたのだった（永井2009：51）」<sup>(1)</sup>。

本論は、この『荒れ野の40年』で示された問題提起の今日的意義を、以下三点から検討する。第一に、上記演説に倣って信仰の対象としてではなく、人間および社会についての理解を深めるための資料として旧約聖書をとらえる。すなわち、キリスト教信仰を前提することなく「エジプトを出る」ことの今日的意義を検討する。第二に、「出エジプト」を記す聖書の箇所（『出エジプト記』『レビ記』『民数記』）を参照し、その「歴史性」を批判的に検討する。このことにより、コミュニティ形成における課題を内的秩序形成と維持の視点からテキストに即して検討する。第三に、持続可能なコミュニティ形成を現代社会における喫緊の課題の一つと捉え、その課題を「エジプトを出る」ことについての聖書の記述を参照して論じる。具体的には、国連が2015年に採択したSDGs（持続可能な発展目標）と関連する三つの理念、「変容」(transformation)、「誰一人

取り残さない」(No one will be left behind)、「気候正義」(climate justice)を検討する。

## 1. 「エジプトを出る」ということ

『出エジプト記』を書いたのは、古代イスラエル王国をつくった人々である。何を目指して自分たちは国をつくったのか、その原点が「エジプトを出た」という記憶、伝承、歴史として記されている。『出エジプト記』に書かれているような規模や形態で「出エジプト」があったか否かはここでは重要ではない<sup>(2)</sup>。語りついだという事実、そして今それにどのように応答するかが問われているからだ。木幡は出エジプトの出来事は紀元前13世紀の終わりと推定されているのに対して、この出来事が書物の形で残されるようになったのは紀元前10世紀前後と考えられていること、つまりこの出来事が200年以上口伝で伝えられてきたとして、伝承の基本姿勢を以下のように指摘する。「伝承を伝えるということは、一方で過去の古いものを受け取りながら、同時にそれが現在の自分たちにとっても意味あることであるから、それも今ここで語るということです。……与えられたものをそのまま鵜呑みにするのではなく、与えられたものを受け取りつつ……今私たちが置かれているこの時、この場で受け取り直す、つまり新たに解釈し直すということです。……[このようにして]受け取ったものが初めて新たに、この時この場で生きてくるのです」(木幡1994:12-13)。イスラエルの民が、コミュニティ形成にあたり「エジプト」および「エジプトを出ること」に託した理念とはどのようなものか、また、それは現代の状況においてどのような解釈によって「生きた」ものになるだろうか。ここで、「上の水」と「下の水」をキーワードとして(太田1996:11)考えてみたい。

古代イスラエル民族の歴史が記された旧約聖書(山我2017:3)の舞台は、古代オリエント文明圏である。そこには、エジプトとメソポタミア(バビロン、アッシリヤ)という発達した官僚機構をもつ二つの大帝国と、両者の間のシリア・カナン地方に位置する小都市国家群があった。そして、そのいずれにも加わらない、あるいは加わることでできない多様な少数民族がいた。その人々は、エジプトとメソポタミアの間で都市に定着することなく、もしくは定着することができずに一つの牧草地から他へと渡り歩いていた。負債が払えず逃げ出してきた人、逃亡奴隷、傭兵たち、小家畜飼育者たちである。「ハビル」(Habiru)と呼ばれたこれらの人々は<sup>(3)</sup>既成の国家集団には属さず、その法的保護の枠外にいたとされる(太田1996:11、伊藤2017:83)。そして、定住して帝国を築いたエジプトおよびメソポタミアの社会と、一か所に定住することなくメソポタミア、エジプトを移動したイスラエルの人々は異なる社会観、人間観を有するに至った。このことを象徴的に表すのが「上の水」と「下の水」である。

「水」は生物が生きていくために必須のものである。命の象徴ともいえる。さて、古代オリエント文明圏においてエジプトとメソポタミアの帝国では雨が降らなかった。そのような気候条件の中で大規模定住社会の形成が可能だったのは、そこに大河(ナイル川、チグリス・ユーフラテス川)があり、それら大河の治水および運河整備事業が可能な社会だったからだ。大規模な治水事業は、事業全体を管理運営する緻密な官僚機構、労働力として利用可能な大量の奴隷、そして

それを統制する強大な権力があって可能となる。実際、エジプト、メソポタミアの帝国は巨大な官僚機構を備え、強大な権力を有した王がその頂点で独裁するピラミッド型の階級社会だった。すなわち、「下の水」（大河）に依存する社会とは、王を頂点として極めて少数の者が支配し、それ以外の大多数は奴隷労働に従事するという社会である。一方、両帝国の中間の地中海沿岸のカナンと呼ばれた地域は、10月から翌年4月の雨季の間に雨がふる。そして、「上の水」（雨）に依存する社会構造が構想された。それは、王と奴隷の存在を拒否した独立自営農民による共同体である。エジプトとメソポタミアの帝国に同化することなく、カナンを目指したイスラエルの人々には自負と誇りがあった（太田1996：15）。それは、自分たちは「下の水」（大河）に依存する社会が前提する人間観、社会観を否定してエジプトを出た者たちの末裔であり、理想の社会を築くのは自分たちだという自負と誇りだ。

このことを現代の状況に置き換えていうならば、「ベトナムかカンボジアかルワンダか、どこかの難民かはともかく、その人たちがいる時、アメリカでもソ連でもなく、日本でもドイツでもない、そのすべてを否定して、私たちこそ本当の人間の社会にふさわしい国を建てるんだと主張したに等しい」。このように指摘する太田は、「聖書の主人公は誰か」という問いに対して「古代オリエン特文明圏の難民たち」と応え<sup>(4)</sup>、「古代オリエン特文明圏三千年間に、国際政治の中に現れた難民の一群がどのようにイスラエル王国なる国を作り、どのように大帝國に滅ぼされたか、しかも歴史の中から消え去らずに常にその存在を主張し続けてきたのはなぜか」を研究テーマとしてきた（太田1996：9）。そして、「その存在を主張し続けてきた」のは、自分たちこそ上記の「人間観」「社会観」を体現するコミュニティであるという自意識からではないだろうか。

とはいえ、当時メソポタミアでも近接する地域でも奴隷制は社会経済構造の基礎であり確立した制度だった。大規模な灌漑農業において奴隷を使役した大規模農業が一般的だった。換言すれば、経済合理性を優先する奴隷制は当時のグローバル・スタンダードだったのだ（橋爪2019：10-13）。このことについて、「当時の圧倒的な現実であった、奴隷制にどういう態度をとるか。これが出エジプトのテーマだとすれば、それは、グローバリズムに翻弄される現代のわれわれにとっても、決してひとごとでない物語だと言える」（橋爪2019：14）。ところで、奴隷の一般的な理解は、虐待を受け、過酷な強制労働を強いられた人である。しかし当時、奴隷は貴重な労働力であったため生活は保障されていたといわれている。つまり、食べ物はある程度与えられ、結婚も可能であり子どもをつくることもできた。ただ、自由がなかった。安定した仕事と生活があっても自由な決定はできない状況に置かれていたのだ。これも現代に置きかえれば、「過労死」が繰り返す問題となるような社会では「ひとごと」とはいえないだろう。この点について、若者を対象としたパレスチナ問題を考える勉強会で、太田は以下のように指摘する。

東京で朝早く満員電車に乗って行って、何が何だか分からない仕事をさせられて、誰がもうけているのかさっぱりわからない。しかも、有名会社に勤めている。また満員電車に乗って帰ってきても、家では寝るだけで、奥さんは未亡人状態。子どもは親なし子状態。しかも、

その上単身赴任なんてことを強制されて、何の決定権もない。それで働いているというのは、なぜ？ 前に「肉鍋」があるからだよね。それは安定である。ここに書いてあるように、強制労働の監督を置かれて、建築作業をさせられて、虐待されたという意識にも到達できない。これは虐待とも思わなくて、いい会社に勤めているとか、いい厚生施設があるとか、給料がいいとか、聞こえもいい。ただし、よくよく見ると、自分は不自由で、家族は不自由で、家は壊れかけている。そういうのもいいのですか、というのが、この話です。（太田 2000a）

安定した仕事と生活はあるが自由がないエジプトを出た、ということは肉体的な苦痛というよりは精神的な領域の問題であったといえるだろう。ここで「肉鍋」と書かれていることについて当該箇所（『出エジプト記』16章3節）をみておきたい。

私たちはエジプトの地で主の手にかかって死んでいればよかった。あのときは肉の鍋の前に座り、パンを満ち足りるまで食べていたのに、あなたがたは私たちをこの荒れ野に導き出して、この全会衆を飢えて死なせようとしています。

ここで、「あなたがた」と名指されているのは、出エジプトを指導した預言者モーセとその兄アロンである。そしてこの伝承は、エジプトの生活を断ち切ることはイスラエルの民にとって困難をとまなうものだったことを意味しているといえるだろう。

先に述べたように、エジプトは高度な官僚組織をもつ帝国であり、奴隷は貴重な労働力だった。奴隷が集団で脱走するのは極めて困難であったと想像できる。それを示すために、エジプトを出る際、モーセがエジプトの王ファラオの魔術師と9回に渡って奇跡合戦をしたと書かれている（『出エジプト記』7章14節－10章29節）。具体的には、水を血に変える、蛙、ぶよ、あぶ、いなごの大量発生、疫病の蔓延、腫れ物の蔓延、雹、闇、である。これを「奇跡合戦」と理解するか、エジプトを脱出することの困難さを当時の表現方法で表したものと捉えるかによって、この伝承を今という時代に如何に「生きたものにするか」（木幡 1994）が変わってくる。例として「水を血に変える」物語を以下に示す。

主はモーセに言われた。「ファラオの心は頑迷で、民を去らせない。明朝、ファラオのところへ行きなさい。彼は水辺に下りて来る。あなたは蛇になったあの杖を手に持ち、ナイル川の岸辺に立って、彼を待ち受け、彼に言いなさい。ヘブライ人の神、主がわたしをあなたのもとに遣わして、『わたしの民を去らせ、荒れ野でわたしに仕えさせよ』と命じられたのに、あなたは今に至るまで聞き入れない。主はこう言われた。『このことによって、あなたは、わたしが主であることを知る』と。見よ、わたしの手にある杖でナイル川の水を打つと、水は血に変わる。川の魚は死に、川は悪臭を放つ。エジプト人はナイル川の水を飲むのを嫌がるようになる。」主は更にモーセに言われた。「アロンに言いなさい。『杖を取り、エジプトの水という水



の上、河川、水路、池、水たまりの上に手を伸ばし、血に変えなさい』と。エジプトの国中、木や石までも血に浸るであろう。」モーセとアロンは、主の命じられたとおりにした。彼は杖を振り上げて、ファラオとその家臣の前でナイル川の水を打った。川の水はことごとく血に変わり、川の魚は死に、川は悪臭を放ち、エジプト人はナイル川の水を飲めなくなった。こうして、エジプトの国中が血に浸った。ところが、エジプトの魔術師も秘術を用いて同じことを行ったのでファラオの心はかたくなになり、二人の言うことを聞かなかった。主が仰せになったとおりである。

（『出エジプト記』7章14節－22節）

これを信仰の対象ととらえるなら、モーセと魔術師の奇跡合戦として文字通り理解し受け入れる必要があるかもしれない。しかし人間と社会についての理解を深めるための歴史資料ととらえるならその必要はない。赤潮は自然現象として観察できる。同様に他の奇跡とされる事象である昆虫の大発生、異常気象、疫病の蔓延、日食等、すべて自然現象として発生しうるのである。これらの異常気象、自然現象が数百年の間に起こり、その都度官僚機構の監視体制が混乱した危機的状況に乗じてエジプトから逃げ出した一群の奴隷がいた、そのような事件が語り継がれ、やがて「出エジプト」を構成する伝承として用いられたと考えることも可能である。このように捉えれば、ここでのメッセージは「エジプトは容易に出ることはできなかった」と要約できる。このことを聞く人が実感をもって理解できるように、書かれた当時の世界観を反映した物語として『出エジプト記』が再構成されたと理解できる（太田2000b）。

聖書の「奇跡物語」の解釈は多様であるべきだろう。上記のような合理的解釈ではなく奇跡をそのまま信じることに意味を見出すことも可能だ（月本2019）<sup>(5)</sup>。ここで警戒すべきなのは、特定の一つの解釈を絶対視すること、そしてその固定化である。一つの解釈の絶対視はその解釈を受け入れない者に暴力的に働く。宗教を原因とする暴力、ハラスメント、抑圧の原因の多くはここにある。解釈の固定化は内発的な応答の力を奪う。すなわち、固定化は、伝承を受け取った者の今、ここでの必然性に照らして「生きた」解釈を考え続ける意欲を削ぐ。次章において荒れ野の40年の経験を聖書に即して検討していく。

## Ⅱ．新しいコミュニティ形成における困難—内発的秩序形成とその維持—

エジプトを出たイスラエルの民は、「約束の地」に至るまで40年間荒れ野を彷徨う。冒頭で指摘したように、「荒れ野」とは意識的に生きていかなくは生存が脅かされる状況である。このような試練の時を出エジプトの後に置いているということは、これまでの生き方とそこで自明視している考え方を変えることがいかに困難であるかを象徴的に表しているといえるだろう。ファラオに仕える奴隷としての安定した生き方を脱し、人（ファラオ）への従属状態を拒否して神にのみ仕える理想の生き方<sup>(6)</sup>を目指す道程—これは、このような新しい生き方に基づく新しいコミュニティ形成を通して目指される—は試練の連続だった。

イスラエルの民は、自由はないが安定したエジプトでの暮らしを脱した。そして、王や奴隷を

認めず、互いに自由な存在としてそれぞれの独自性を尊重するコミュニティを目指して「荒れ野」に入った。「荒れ野」は生きていくための糧を自分たちで確保し、外敵から身を護らなければならない状況である。このような緊張を強いられる状況において人々の意見が対立し、先鋭化することもあった。たとえば、『民数記』12章では民の指導体制をめぐり対立があったことを記している。このような対立に適切に対処しなければ、コミュニティは内部崩壊する。この内的秩序を力による強制での一方的な統制のもと維持していたのがエジプトだった。その方法を採用せず、いかにして自由な存在が内発的に秩序形成に向かうことが可能か。それが、ここでの中心テーマである。

以下、本論では第Ⅰ章で紹介した「エジプトの肉鍋」に続いて語られる「マナの話」（『出エジプト記』15章22節－15節）および「ヨベルの年」（『レビ記』25章）の内容を踏まえ（太田2000c）内発的な内部秩序維持の今日的意義を検討する。

エジプトを出た後、イスラエルの民が飢えに苦しみモーセとアロンを非難した。人々の訴えを受け、以下のように物語は展開する。

主はモーセに言われた。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。」（16章4節）

夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」（16章13節－16節）

イスラエルの民は食べ物がないことについて不平を言ったところ、食べ物（パン）が与えられた。しかし、パンだけではなかった。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』という「ことば」も受け取った。これは、いわば財の分配ルールとともに物質的な必要が与えられたということであり、このルールはすぐ後で述べるように内的秩序維持にとっても不可欠なものだ。そして、このルールを与えたのはモーセではなく、「主」（人を超えた存在）である。つまり、このルールの根拠は人に由来するものではない、ということだ。

コミュニティを構成する一人ひとりが生かし生かされる関係となるための根拠となるルールが、コミュニティ形成の前提として示されている。換言すれば、このルールを人間の恣意的な判断や状況の変化によって反故にすればコミュニティの存立基盤も危ういものになる、すなわち持



続可能ではないということだ。

しかし、そのルールをイスラエルの人々はまもらなかった。物語は以下のように続く。

イスラエルの人々はそのとおりにした。ある者は多く集め、ある者は少なく集めた。しかし、オメル升で量てみると、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた。  
(16章17節、18節)

「ある者は少なく集めた」というのは、意図的にそうしたわけではない。「集め損った人がいた」ということである。その一方で必要以上に多く集めた人もいた。これはコミュニティ成員間で体力や知力などの能力の差があること、また運が良かったか否か等境遇が多様であることを示している。多様であることが、ある者にとっては有利に、他の者にとっては不利に作用し、格差は拡大する。それを放置するならばそのコミュニティの内的秩序は維持できない。このような現状認識から「しかし、オメル升で量てみると、……それぞれが必要な分を集めた」という物語がうまれた<sup>(7)</sup>。

結果的に必要な分をそれぞれが集めたという物語がつくられたということは、現実はそうではなかったということだ。このように民が神の示したルールをまもらない状況を目の当たりにして、モーセは「だれもそれを、翌朝まで残しておいてはならない」と言った。これは、いわばルールに実効性をもたせるための細則ともいうべきものだろう。翌朝まで残しておけないのであれば、必要以上を取ることはなくなるからだ。しかし、

彼らはモーセに聞き従わず、何人かはその一部を翌朝まで残しておいた。虫が付いて臭くなったので、モーセは彼らに向かって怒った。そこで、彼らは朝ごとにそれぞれ必要な分を集めた。日が高くなると、それは溶けてしまった。  
(16章19節-21節)

「日が高くなると、それは溶けてしまった」ということは、モーセの叱責にも関わらず必要以上に取った人がいた、ということである。このように神から示されたルールを守らない様子が繰り返し描かれる。そのような中で、次に語られるのは安息日の規定である。

六日目になると、彼らは二倍の量、一人当たり二オメルのパンを集めた。共同体の代表者は皆でモーセのもとに来て、そのことを報告した。モーセは彼らに言った。

「これは、主が仰せられたことである。明日は休息の日、主の聖なる安息日である。焼くものは焼き、煮るものは煮て、余った分は明日の朝まで蓄えておきなさい。」

彼らはモーセの命じたとおり、朝まで残しておいたが、臭くならず、虫も付かなかった。モーセは言った。

「今日はそれを食べなさい。今日は主の安息日である。今日は何も野に見つからないであろ

う。あなたたちは六日間集めた。七日目は安息日だから野には何もないであろう。」

七日目になって、民のうちの何人かが集めに出て行ったが、何も見つからなかった。主はモーセに言われた。「あなたたちは、いつまでわたしの戒めと教えを拒み続けて、守らないのか。よくわきまえなさい、主があなたたちに安息日を与えたことを。そのために、六日目には、主はあなたたちに二日分のパンを与えている。七日目にはそれぞれ自分の所にとどまり、その場所から出てはならない。」

民はこうして、七日目に休んだ。イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした。（16章22節－31節）

ところで、古代オリエント文明の歴史を通して、七日目に休むという生活のリズムを考案し暮らしの中で実践したのは、古代イスラエル人とその伝統を受け継ぐユダヤ教徒だけだった。たとえば古代メソポタミアの神話の一つであるアトラ・ハシース叙事詩は、人間は働くためにつくられたと語る。その物語には、位の高い神々と低い労働者階級の神々が登場する。位の低い労働者階級の神々は重労働に耐えかねてストライキを起こす。そこで、位の高い神々はその重労働を担わせるために人間をつくった。この、「働かない神々」と「働くためにつくられた人間」の区別は、生産労働に携わらない王や貴族などの支配者階級と生産労働に携わる一般民衆に身分が分かれていた古代社会のあり様を反映している。ここに、働く者が休みを取るという発想はない。一方イスラエル民族の神は率先して安息日をとる（『創世記』2章2節）。このように七日ごとの安息日は、神が定めた全宇宙の根本秩序として描かれる。したがって人間の都合で廃止できるものではない（久保2015）。すなわち安息日の掟は「十戒」の戒律として神から与えられた（『出エジプト記』20章8節－10節）。

安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。

「六日の間働いて、何であれあなたの仕事を」する間に能力の差、偶然によって社会的格差も広がっていくことが想定される。その結果、働くばかりの人と働かなくても生きていける人が現れるようになり、その格差は拡大固定化しかねない。七日目は、すべての人が働かないことによって本来すべての人が平等であることを再認識する機会となる。日々の暮らしの中で、定期的にこのことを意識することの延長線上に「ヨベルの年」がある。

ヨベルの年の規定も安息日と同じく「荒れ野の40年」の間に神からイスラエルの民に示されたものだ。ヨベルの年は四つの規定を含んでいた。すなわち、土地を休ませること、負債の免除、奴隷の解放、家族の財産を各個人に返すこと、である。

あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。五十年目はあなたたちのヨベルの年である。種蒔くことも、休閒中の畑に生じた穀物を収穫することも、手入れせずにおいたぶどう畑の実を集めることもしてはならない。この年は聖なるヨベルの年だからである。あなたたちは野に生じたものを食物とする。（『レビ記』25章8節－12節）

「安息日」そして「ヨベルの年」は平等回復を目指す社会プログラムであり、いずれも内部秩序維持に資する具体的方法であったといえる。そして、マナの物語は、荒れ野において内発的な内的秩序維持につながる生き方が神から示されたことを語る。すなわち、必要な分だけ取る、今日の分だけ取る、平等を回復する仕組みを日常生活に組み込む、の三点である。ここに見られる社会観、人間観とは、コミュニティ内における格差の拡大と固定化は内発的な内的秩序形成を阻むこと、しかし人間はその資質や状況が多様であるので常に格差が生じる可能性があること、そのために一度発生した格差を是正する様々なプログラムが必要だ、ということだ。そして畳みかけるように、イスラエルの民はそれにすぐに従うことはない、ということも示している。これは、「変わる」ということがいかに困難であるかを表しているといえるだろう。

イスラエルの民は、新しいコミュニティ形成を目指してエジプトを出た。エジプトを出る時の「奇跡合戦」は、高度に発達した官僚組織をもつエジプトから脱することの外的な困難を表していた。そして、荒れ野に入ってから数々の試練は新たなコミュニティを作ること、すなわち新たな生き方を生きるために自ら変えることの難しさ（内的な困難）を語っていた。次章ではこの物語が語る新しいコミュニティ形成の課題を現代社会の状況において検討する。

### Ⅲ. 「出エジプト」の道標としてのSDGs

「世界経済フォーラム」(WEF)<sup>(8)</sup> は2021年次総会（ダボス会議）のテーマを「グレート・リセット（great reset）」とした。この「グレート・リセット」は、「新しい経済と社会は大不況からリセットされ生まれる」との考え（リチャード・フロリダ）に依る。フロリダは、人類が経験した過去2回の「グレート・リセット」として1873～1896年の大不況（Great depression）、1929年～1930年代後半の世界大恐慌（The Great Depression）を挙げ、3回目がリーマン・ショックを契機として始まったと主張した（フロリダ2011）。世界経済フォーラムは、この3回目を『新型コロナウイルス(COVID-19)』後に訪れるととらえた（日本SDGs協会2020）。

年次テーマとしての「グレート・リセット」について、同フォーラムのホームページには以下のコメントが掲載されている（World Economic Forum2020）。

我々が直面している人類の悲劇を我々人類に対する警鐘として、グレート・リセットを捉え

なければならない。私たちは、パンデミックや気候変化、他の多くの地球規模の変化に直面しており、より平等で包括的かつ持続可能な経済と社会を構築しなければなりません。

(アントニオ・グテーレス国連事務総長)

グレート・リセットは、人類の尊厳を中心に添えた新たなソーシャル・コントラクト（社会契約）を構築するために不可欠です。グローバル・ヘルスの危機は、社会的結束、機会均等、包摂性の欠如といった、古いシステムの非持続性を露呈しました。また、人種差別や差別の弊害から目を背けることもできません。私たちは、新しい社会的契約を世代間の責任に組み込み、若い世代の期待に応えられるようにする必要があります。

(クラウド・シュワブ世界経済フォーラムの創設者・会長)

グレート・リセットは「公正で持続可能かつレジリエンス（適応、回復する力）のある未来のために、経済・社会システムの基盤を緊急に構築するというコミットメント」と定義された。「リセット」である以上、再構築が求められている経済・社会システムの基盤はこれまでの微修正ではない。根本的、具体的な変化が求められている。その変化の道標ともなりうる指標として6年前にすでに国連で合意された目標がある。SDGs—持続可能な発展目標—である。

2015年9月、国連総会はSDGsを全国連加盟国193カ国が賛同して採択した。蟹江は「このSDGsには、この先もずっとこの地球上に住み続け、人類が繁栄していくために、日本と世界がやらなければならないことが詰まっている……「未来の世界の骨格」である」として、政治的なイデオロギー、経済規模、軍事力等の違いを超えてすべての国連加盟国が「将来の世界の姿はこうあるべきだ」という目標に賛同していることが重要であると指摘する（蟹江2020）。「あるべき姿」を共有しているということは、現状は「あるべき姿」ではないという認識も共有しているということになる。この認識をもたらした一つのルーツに「ジュビリー2000」がある。これは2000年までに重債務最貧国の債務を帳消しにしようという国際的な運動である。ジュビリーとは第Ⅱ章で紹介した「ヨベル」であることから、これは貧困に困っている国を助けるという情緒的な運動ではなく、正義を回復する運動であることが明らかになる。すなわち、膨大な債務を抱えている国とそれを貸し付けている国があるという状態は「あるべき姿」ではないという認識である。

SDGsは、その採択文書の冒頭に「変容、変革」(transform)が使われている(Transforming our world)。これは、「あるべき姿」に至るには微修正ではなく根本的な変化が必要であることを宣言しているといえるだろう。これを「エジプトを出る」に相当する変化ととらえるなら、そこには二つの困難があることになる。一つ目のエジプトを出るための外的な困難に相当するのは、社会制度や既存の産業構造を変えることの難しさ、変化を望まない人々の抵抗が考えられる。もう一つ内的な変化についての困難は、これまでの生活習慣や価値観、常識を変えることに伴うものといえる。

SDGsの前文第二段落の最後の一文である「誰一人取り残さない」(No one will be left behind)

は、この目標の理念として引用される。これは前章で検討した内発的・内的秩序維持と関連する。「誰かを残す」状態を放置することは「あるべき姿」ではなく、是正されなくてはならない。なぜならそれは持続可能ではないからだ。このことを具体的に問題提起しているのが「気候正義」(climate justice)である。気候変化の主な原因を生み出している工業先進国は、その資金、技術力、政治力によって気候変化をもたらす自然災害に一定程度対処可能である。しかし気候変化の原因を生み出していない開発途上国が自然災害の犠牲者となっている。これも「あるべき姿」から乖離した現状を表しているといえるだろう。

このようにSDGsが示す目標達成への道筋を「エジプトを出る」ことから検討することで明らかになることは、変化は試練であり、困難を抱えているということである。この点を端的に表したのが「SDGsはアヘンである！」という指摘である（斎藤2020）。斎藤は「SDGsはアリバイ作りのようなものであり、目下の危機から目を背けさせる効果しかない」と断じる。続けて、「温暖化対策をしていると思ひ込むことで、真に必要とされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまうからだ。良心の呵責から逃れ、現実の危機から背けることを許す「免罪符」として機能する消費行動は、資本の側が環境配慮を装って私たちに欺くグリーンウォッシュにいつも簡単に取り込まれてしまう」という（斎藤2020）。ここでいう「大胆なアクション」とは、私的所有と経済成長を前提した資本主義経済から、生活圏内での共有（シェア）を基盤とした当事者による自主管理経済システムへの移行である。これには大胆な内的変化が必要だ。だが、SDGsは実現可能性を重視することで、結果として現状肯定を許容する。既存の価値観、常識の変化を必須のものとはしない。これは私たちが変わることがいかに困難であるかを表しているといえるだろう。では、その困難な「変わること」の契機はどこにあるのだろうか。

一つの可能性は、新型コロナウイルス（COVID-19）への対応が、本当に大切な（essential）こととそうでないことを意識する機会となったことである。この意識を梃として変化を生み出すことができるかもしれない。本当に大切なことに関わる仕事を担う人々を「ケア階級」と名付けたデヴィッド・グレーバー（グレーバー2020）は、COVID-19への対応を通して「わたしたちは、わたしたちをほんとうにケアしているのはどんな人びとなのかに気づいた。ヒトとしてのわたしたちは壊れやすい生物学的存在にすぎず、互いをケアしなければ死んでしまうということに気づいたのです」と指摘する。ケア階級の対概念として、グレーバーは「ブルシット・ジョブ（どうでもいい仕事）」を提示する。意味のない会議に出るための書類作成、なくともいい書類のための資料収集など、世の中に意義のある貢献をしているとは思えない仕事、「どうでもいい仕事」である。そして、現代社会はその「どうでもいい仕事」を中心に回っており、このような無意味な仕事一般に高い報酬が得られるのに対して、本当に必要なケアに関わる仕事の報酬は低い。ブレイディみかこは、英国で実施された世論調査で37%が「自分の仕事は世の中に意義のある貢献をしていない」と回答した結果とともに、「内心必要がないと思っている作業に時間を費やし、道徳的、精神的な傷を負っている」とのグレーバーの発言を紹介している（ブレイディ2020）。

道徳的、精神的な傷を負いながら、もしくはそのような傷を負っていることの自覚もなくこの



ような仕事に従事する背景は「エジプトの肉鍋」と重なるかもしれない。すなわち生活は安定しているが、「これは、あるべき姿ではない」という内なる声が意識される状態である。このように捉えるなら、本当に大切な（essential）ことを意識した今は「エジプトを出る」機会と位置付けることもできるだろう。

二点目は学びの意義の再認識である。エジプトを出た後、新しいコミュニティ形成にあたり「神」から示されたルールは、必要な分だけ取る、今日の分だけ取る、平等を回復する仕組みを日常生活に組み込む、の三点だった。これは日々の暮らしを意識化することであり、これが変化の契機になる。これまで必要以上に好きなだけ取っていた、明日の分も取っていた、それが結果として地球環境に過度な負担となり、またコミュニティ内で格差拡大をもたらすことにつながった。このような状態から変化が必要になるのだ。その変化をもたらすのが「学び」である。

ピーター・センゲは「学び」について次のように指摘する。「西洋の文化の中で、学習する組織に起こることを最も正確に言い表している言葉は、数百年前からあまり使われなくなった。……その言葉は「メタノイア」であり、心の転換を意味する。……「メタノイア」の意味をつかむことは、「学習」のより深い意味をつかむことである。なぜなら学習も認識の根本的な転換や変化を伴うからだ」（センゲ：49-50）。これまで自明視していた生活習慣や価値観、つまり「私が今持っていて、気付いていない思い込み（仮説）」が変わるにはこのような学習の機会が必要であり、それは自分とは異なる思い込み（仮説）をもった他者との出会いが決定的な契機となる。

三つ目の可能性が、高齢者と若者の連帯である。この両者は社会の変革の担い手になりうる（木村2000：117-118）。まず両者とも体に変化しやすい時期にある。若者は成長期であり、高齢者は老化が進むに従い身体機能の顕著な変化がみられる。次に両者とも社会の主流世代から対等な扱いを受けない。若者は経験不足を理由に、高齢者は時代遅れを理由に両者の発言は等閑視されがちである。しかし、そのことが変化を先導しうる立場に両者を置いているのだ。気候変化に対して実効性のある対策を社会の主流世代に求めた学校ストライキ運動は全世界の若者に広がった。また高齢社会白書は日本において高齢者の多くが社会活動に参加している調査結果を公表している。

福祉的な財の分配において競合関係にあるとされる両世代であるが、高齢者の存在はケアの意味を若者に意識させ、若者の存在は「あるべき未来」を高齢者に意識させる機会となる。両世代とも互いに「本当に大切なこと、意味のあること」について学び合える関係にある。このことを意識化する場と機会をつくることができれば、両者は「変わること」の先鞭をつける立場にあるといえるのではないだろうか。

## おわりに

COVID-19への対応を通して広く知られるようになった用語の一つに「隔離」がある。この英語（quarantine）の語源はイタリア語のquaranta、「40」である。ヨーロッパ全土に黒死病が猛威を振るった14世紀半ばに初めて実施されたこの対策の隔離は40日間だったが、この期間に医学



的根拠はなく、何を阻止しようとしているのかも不明なまま定められた。聖書に「浄化」という文脈で40という数字が出てくるため、このような象徴的・宗教的な理由で決まったのだという（シュワブ2020）。14世紀とは異なり、現在私たちは多くの知識と技術をもって今回の感染症拡大という危機の対策にあたっている。しかし、かつての「隔離」のもっていた象徴的な意味である「浄化」を「変わること」と理解するなら、外的な対応だけでなく内的な変化とそのための学びをも必要とする。

「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」。これは冒頭で挙げた『荒れ野の40年』の中にある一節である。過去に目を閉ざすことを本論の文脈で考えるなら、それは自分のこれまでの考えの傾向ということになる。それを批判的に再吟味することなく今直面する課題に有効に対処することはできない。これは、前章で紹介したピーター・センゲの師であるウンベルト・マトゥラーナの「ただ内省を通してのみ、私たちは歴史を変えることができる」との指摘にも通じることだろう（福谷2021）。

新しいコミュニティ形成における課題を検討する際の一つの原型として、本論では「出エジプト」を取り上げた。ここで明らかになったのは、「エジプト」が象徴的に表していることの今日性と「変わる」ということの困難、そして変わるためには他者の存在が必要であるということだった。そして互いに存在を保障し合うこと、すなわち「生かし、生かされる関係」が、持続可能な内発的秩序的維持につながることをみた。

## 注

- (1) このヴァイツゼッカーの演説には題名はついていなかったが、日本語翻訳を永井清彦氏に依頼した岩波書店『世界』編集長安江良介氏（当時）により「荒れ野の40年」と名付けられた（永井2009：51）。
- (2) 1970年代から1980年代に「聖書考古学」が著しく発展したことにより、旧約聖書における記述は後のユダヤ民族がそうであったと信じたいと願ってつくり上げたものと見做されている。もちろん、その記述の中には歴史的事実を反映したものもあると思われるが、それでも慎重な検討が必要である。「出エジプト」に関しても60万人もの壮年男子がエジプトを出たと『出エジプト記』には書かれているが（12章37節）、そのような規模で出エジプトが行われたことを示すエジプト側の資料や考古学的証拠は見つかっていない（伊東2017、月本2019）。
- (3) メソポタミア式では「ハビル」と呼ばれたこれらの人々はエジプトの発音では「アビル」、旧約聖書では「イブリ」（ヘブライ）と呼ばれた（太田1996：10）。
- (4) また、「旧約聖書は難民のおびただしく諸地にいたことを記す古代文書の一つである」（犬養1983：65）との指摘もある。
- (5) 月本は、遠藤周作が「合理的理解は人間の精神の貧困さを示している。それに比べれば、奇跡をそのまま信じる、そういう人間の心性のほうがはるかに高尚である。」と書いているのを読み、奇跡物語の合理的解釈から離れたという（月本2019：4）。
- (6) 人（ファラオ）への従属状態を拒否することを、聖書が書かれた時代の世界観で表せば「神にのみ仕える理想の生

き方」となる。現代において「神」の存在を前提にする必要はない。

- (7)「荒れ野」とはいわば訓練期間であり、ここでは神の采配により必要量を全員が確保した。しかし、約束の地に入り神の指導から離れると貧富の格差が開いていった（太田2000c）。
- (8)「世界経済フォーラム」は、政治、経済、学究、その他の社会におけるリーダーたちが連携し、世界、地域、産業の課題を形成し、世界情勢の改善に取り組むことを目的とした国際機関である。50周年を迎えた2020年はスウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさん（17歳）が演説した。

## 参考文献

- 伊東俊太郎（2017）「イスラエルにおける「精神革命」（Ⅰ）—古代イスラエルの社会と思想—」『比較文明研究』22巻。
- 犬養道子（1983）『人間の大地』中央公論社。
- ヴァイツェッカー（2009）『新版 荒れ野の40年』岩波書店。
- 太田道子（1996）「難民としてのユダヤ人」『福音と世界』51巻1号。
- 太田道子（2000a）「出エジプト記を読む①」配布資料NGO地に平和勉強会（2000年2月27日 飯田橋事務所）。
- 太田道子（2000b）「聖書を読む会 エジプトに下された災い」配布資料NGO地に平和勉強会（2000年2月29日 飯田橋事務所）。
- 太田道子（2000c）「出エジプト記を読む②」配布資料NGO地に平和勉強会（2000年3月20日 飯田橋事務所）。
- 蟹江憲史（2020）『SDGs』中公新書。
- 木村利人（2000）『自分のいのちは自分で決める』集英社。
- 木幡藤子（1994）「出エジプトの神」『聖書セミナー』10号。
- 久保文彦（2015）「安息日と人権」明治学院大学大学礼拝奨励（2015年5月26日）。
- グレーバー, D. (2020)『ブルシット・ジョブ』岩波書店。
- 斎藤幸平（2020）『人新世の「資本論」』集英社新書。
- シュワブ, K. 他（2020）『グレート・リセット』日経ナショナルジオグラフィック社。
- センゲ, P. (2011)『学習する組織』英治出版。
- 橋爪大三郎（2019）『これから読む聖書 出エジプト記』春秋社。
- 月本昭男（2019）「聖書に学ぶ：「出エジプト」伝承の史実性とその思想的意義」『藤女子大学 キリスト教文化研究所』18号。
- 日本SDGs協会（2020）「コラム7号『地球市民教育というアジェンダ 3／3』」2020年9月26日  
<http://japansdgs.net/fy2ed0jv3oc0hx/column.html>（2021年2月17日アクセス）
- 福谷彰鴻 Learning Sandbox  
<https://mylearningsandbox.wordpress.com/2014/08/14/%E3%81%9F%E3%81%A0%E5%86%85%E7%9C%81%E3%82%92%E9%80%9A%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%AE%E3%81%BF%E3%80%81%E7%A7%81%E3%81%9F%E3%81%A1%E3%81%AF%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%82%92%E5%A4%89%E3%81%88%E3%82%8B%E3%81%93/>  
（2021年2月17日アクセス）

ブレイディみかこ（2020）「コロナ禍で響いた拍手忘れないで」『朝日新聞』2020年6月11日。

フロリダ, R.（2011）『グレート・リセット』早川書房。

山我哲雄（2017）「聖書に学ぶ—旧約聖書の歴史観 特にいわゆる「申命記史書」を中心に」『藤女子大学 キリスト教文化研究所』16号。

World Economic Forum2020, The Great Reset: A Unique Twin Summit to Begin 2021, News Releases, 03 Jun 2020

<https://www.weforum.org/press/2020/06/the-great-reset-a-unique-twin-summit-to-begin-2021/>（2021年2月17日アクセス）